

出張サロン in 神戸 -HFA セミナー報告

【主催】兵庫県サッカー協会／サロン 2002

【日時】2001年12月15日(土) 18:00～20:30 兵庫県立生活創造センター研修室

【参加者】<サロン 2002 会員>北岡真幸、倉岡紀文、中塚義実、中塚頼彦、本多克巳、松岡耕自
<サロン 2002 関係者(会員の紹介あり)>塩見元 (会社員)、生田泰志 (大学教員)、桜井誠一 (神戸市役所)、寺田雅裕氏 (神戸市立高専)、山道健一郎 (神戸大学4年)、東栄蔵 (神戸大学3年) 他
<兵庫県サッカー協会関係者>長岡康規 (兵庫県サッカー協会理事長)、加藤寛 (ヴィッセル神戸／NPO法人神戸アスリートタウンクラブ理事長) 他約30名。計50～60名

2010年のサッカー環境-DUOリーグの試み-

中塚義実(筑波大学附属高校/DUOリーグチェアマン)

<目次>

<司会者(加藤寛氏)あいさつ>

<はじめに>

■ごあいさつ

■「出張サロン」としてのセミナーの位置付け-サロン 2002 とは

■資料の確認

<プレゼンテーション1-DUOリーグの試み>

■1. なぜDUOリーグに行き着いたのか

■■2. これまでの日本のスポーツと本来のスポーツのあり方

(1) スポーツのあり方から 「プレイ」-「スポーツ」-「競技」-「戦争」

(2) スポーツ集団のとらえ方から 「チーム」-「クラブ」-「アソシエーション」

(3) スポーツ空間のとらえ方から 「ピッチの中」-「ピッチの外」-「実社会」

(4) スポーツとの関わり方から 「する」-「みる」-「語る」-「ささえる」

(5) ライフ・マネジメントの観点から 「歯磨き感覚のスポーツライフ」「アマチュアに引退なし」

(6) まとめ-これまでのスポーツからこれからのスポーツへ

■■■3. DUOリーグの試み

(1) DUOリーグの理念

(2) DUOリーグの誕生

(3) DUOリーグのあゆみ

★1996年度前期

★1996年度後期

★1997～99年度

★2000年度

★2000年度

(4) DUOリーグの運営

<ディスカッション1>

★東京都ユースリーグのイメージ

★協会や高体連との関係

★登録・移籍について

★シーズン制について－"衛星型サッカー環境"とフットサルを含めたスポーツライフのイメージ

★オフシーズンの過ごし方

★学校との関係－リスクマネジメント・学校施設の開放について

<プレゼンテーション2－筑波大学附属高校の試み>

■ 1. 引退なしのスポーツライフ

■ ■ 2. クラブ化の進行

(1) サッカークラブ内にアスリート部門とフットサル部門誕生

(2) 校内フットサル大会の開催

(3) アスリート部門の苦悩

(4) 現在の状況－アスリート、フットサル、女子の3チーム体制

(5) サッカークラブとしての活動

■ ■ ■ 3. 「FC DUO構想」について

<ディスカッション2>

★オフィシャル化と遊びの部分

★DUOリーグの成果

★リーグ加盟クラブの条件

★高校生の選択能力（自己決定能力）の問題

★2010年の「イベント」のイメージ

★DUOリーグの実務

★付き添いの問題－参加チームの条件

<司会者（加藤寛氏）まとめ>

<司会者（加藤寛氏）あいさつ>

12月も半分終わりました、外の空気は最早クリスマスという年末の慌ただしい時期に、たくさんの人に来て頂いて有難うございます。私は兵庫県サッカー協会でスポーツクラブ委員会の委員長を仰せつかっています加藤といいます。どうぞよろしくお願ひします。

ここにおられます皆さんは、兵庫県サッカー協会スポーツクラブ委員会の方、それから兵庫県の将来を少し考えましょうということで、ここにおられる益子先生が委員長になられている「将来構想委員会」という委員会、それから中塚先生のグループであります「サロン2002」という、これは後でまた中塚先生の方からご紹介頂くとおと思いますが、非常にユニークな活動を全国展開されている団体の方に来て頂きまして、少しこれから日本のサッカーがどう変化していくのだろうか、あるいはどう変化させていくべきなのか、という指針になるようなお話が聞けたらと思っています。

中塚先生は筑波大学附属高校の先生をされ、サッカー部の部長もされながら、日本サッカー協会の科学研究グループのメンバー、そして日本クラブユース連盟の理事で、将来構想等をディスカッションしているメンバーの一人です。皆さんのお手元に「DUOリーグ」のプログラムがいていると思いますが、非常にユニークな活動で、かねがね私は感心して見ていました。私一人じゃなく、こういう輪が兵庫県の中に広がって行って欲しいと思ひまして、今日は私が中塚先生にお願いして東京の方から来て頂きました。

それでは、コマーシャルの時間が終わりました、いよいよキックオフです。中塚先生よろしくお祈りします。

<はじめに>

■ごあいさつ

皆さんこんばんは。ご紹介頂きました中塚です。まず最初に、今日ここで話をする機会を与えて下さった兵庫県協会の皆さん、それから裏方として支えてくださったFCジャパンの本田さんに御礼申し上げます。ありがとうございます。

最近DUOリーグの話をする機会が結構増えてきて、この理念と活動を全国に、あるいは他の種目の方に紹介するチャンスが増えて非常に有難いと思ひているのですが、この間もクラブユースのシンポジウムで話をするチャンスがありました。10分間だけです。笹川スポーツセミナーでも話をするチャンスがありました。これも10分間だけです。10分では自分の考へていることのさわりの部分しかお伝えできなくてすごくもどかしい思ひをしていたのですが、今日はたつぷり2時間あるということで、すぐくこちらも気合を入れて、資料などもたつぷり用意してきました。資料には無料配布のものと有料のものがありますので、なかなか面白いぞということであれば有料のコーナーにも手を出していただければなあ、そんなふうと思ひています。

■「出張サロン」としてのセミナーの位置付けーサロン2002とは

まずこのセミナーの位置付けです。先程加藤さんからお話がありましたが、兵庫県協会の事業であると同時に、サロン2002の月例会でもあります。「サロン2002月例会テーマ一覧」をご覧ください。これは一体何ものかと言いますと、もともとは日本サッカー協会の科学研究委員会の中で、社会学や心理学に興味を持っている人たちが勉強会をやっていたのです。ちょうど80年代の終わり頃からです。その後Jリーグが起ちあがって、その勉強会に、サッカーに関わる色んな職業の人がやって来るようになりました。僕達は研究者というスタンスで、例えばプロ選手のセカンドキャリアについての論文を読んだりしたんです。だけどプロ選手が本当に生まれて、そのプロ選手のセカンドキャリアを職業として考へなければならぬ人が出てきて、我々の研究会に顔を出すようになったのです。

93年を境にして色んな分野の方がこの「サロン2002」、当時は社会学と心理学の社と心を取って、「社心グループ」と言っていたのですが、その会に参加するようになりました。参加者はさらにその後も層を広げて、地域も広がって、研究者の集まりの団体ではなくて、もう一步踏み出そうじゃないかということで、97年度から「サロン2002」を名乗って月例会を定期的に続け、2000年度からは会員制の組織になりました。もちろん2002というのは、2002年を大切な通過点として意識していこうということです。

サッカー・スポーツを取り巻く話題、今から振り返ってみると結構面白いテーマで色々やっているなど我ながら思うのですが、時々外へ出掛けて「出張サロン」というのをやっています。2001年度は、8月に出張サロンを清水でやりまして、地元の方々と交流しました。今日は兵庫県協会のセミナーに乗っからせて頂く形で、「出張サロン in 神戸」ということでサロン関係者にも何人かお声がけしたという次第です。いろんな地域に出向いて、その地域の人達と話をすることで、僕等も次のエネルギーになるものですから、すごく今日は、懇親会も含めて非常に楽しみにしております。

■資料の確認

ざっと資料だけ確認させて下さい。今日の話の大枠になるのが、このA4のもので、一応この流れに従って私の方で所々質問コーナーなどを挟みながら進めさせて頂きたいなど。それから今見ているのがその補足資料になります。「ユース年代にリーグ戦を」(『高校サッカー年鑑2001』より)、「スポーツの側から学校運動部を見直そう」(『体育科教育』2001年6月号)という綴じられたモノ。これは読み物になっていますので、持ち帰って読んでもらったらいいかと思います。さらにこの「DUOリーグ」という冊子。これは、「高校サッカーを考える会」という、強豪高の先生方が中心になって意見交換する会がありまして、そこが年1回新聞を発行しています。その強豪高の先生方の新聞に、DUOリーグっていう底辺の話を掲載させてもらえました。その記事をひとまとめにしてプレゼン用につくったものです。それから更にA4の冊子(「第51回社会を明るくする運動、第1回東京都ユース(U-18)フットサル大会報告書」)ですね。私、実は東京協会のフットサル委員も仰せつかっておりまして、2種のフットサル大会、高校生年代の大会を今年初めてやりまして、それが非常に面白かったので、第1回大会の報告書をPR用につくったものです。後程時間があればこれについても触れたいと思います。あと、刷り物になっているのは「98年ワールドカップ・フランス大会研修報告改訂版」。これは今日の本題とは全然関係ないのですが、フランス大会、私も初めて現地へ研修という形で行くことができました。学校の先生、自分の同僚の先生ですね、ワールドカップってこんなにすごいということを知ってもらおう為につくったものです。これはオマケなので、後程見て頂けたらと思います。あとはプログラム等の冊子類です。これも追って説明します。

<プレゼンテーション1-DUOリーグの試み>

■1. なぜDUOリーグに行き着いたのか

自己紹介を兼ねながら、なんでDUOリーグに行き着いたのかというところを簡単に説明したいと思います。私自身は父親がサッカーをやっていたこともあって、小さい頃からボールには触れていたのですが、組織的なサッカーに関わったのは中学校のサッカー部です。大阪府の茨木市立南中学校というところで、当時は熱血若手先生がグイグイ引っ張っていくような運動部でした。最初に触れたのが学校運動部、それも教師主導型の競技志向の、要するに伝統的なスタイルの学校運動部を中学の時に経験しました。

高校は大阪府立三島高校というところなのですが、そこは中学の時と全く逆で、顧問の先生はもちろんいらっしゃるのですが、部活動自体はキャプテン中心に練習計画を立てて、試合に出るメンバーもキャプテン中心に決める。練習試合の相手もキャプテンとマネージャーで相談して決めるという、いわゆる生徒主導の民主的な運営をする部でした。ただ、高校に入って一番最初の部活で、当時3年生だったキャプテンに「1年生集合」と集められて言われたのが、「お前等な、サッカーには勝つサッカーと楽しむサッカーがあるんや。お前等がどっちを選ぶかは自分達で決めるんやぞ」というようなことでした。最初はその意味が全然わからなくて、途中まで全然わからなかったんです。勝つサッカーしかないと思っていたから。楽しめればそれでいいというのが存在することが自分には考えられなかったんですね。

私自身キャプテンになって、練習計画など立てて、とにかく勝つために、ちょっとでも上手くなるために一所懸命やってたんですけど、自分が3年生の時に下級生がゴソッと辞めていった事件がありまして。要は「中塚さんのやり方にはついていけない」と。「僕らは楽しむためにサッカーをやっているのだ。勝つためにこんなキツイことばかりやるのは、僕らにはついていけない」ということでゴソッと辞めてしまった。それがひょっとすると、今のDUOリーグにつながる考えの、自分の体験の部分での発端にあるのかなと思っています。

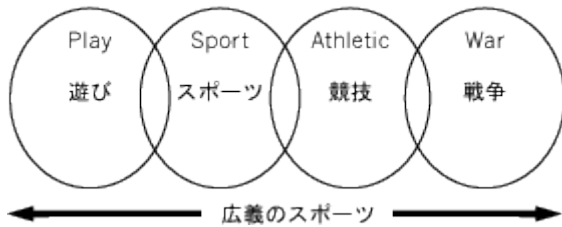
大学は筑波大学を選びまして、今日も当時の仲間が何人か来ているのですが、筑波大学のサッカー部は当時部員は100人いました。強い人達、つまり日の丸をつけているような人達はAチームですね。A・Bチームという単位で30人位で練習していました。それ以外の人たちはC・Dチームで、時間帯も全部ずらして活動していました。C・Dの連中がどんどんモチベーションが低下していく様子を、中でプレーしながら体験していました。チームって何だろう？クラブって何だろう？というのを一所懸命考えたのも、たぶんその時です。

ちょうど大学3年で、サッカーとは別に自分の専攻分野を選ぶ時になって、スポーツ社会学を選びました。他にやりたいことがなかったというのもあるし、スポーツ社会学では何をやってもいいような雰囲気もあったんで、そこで勉強することになったんですけど、このスポーツ社会学で学んだことは、自分の中でモヤモヤしていたものを整理するのに役立ちました。それがお配りした資料の大きな2番、「これまでの日本のスポーツと本来のスポーツのあり方」の、本来のスポーツのあり方という話にここから入っていきます。

■■ 2. これまでの日本のスポーツと本来のスポーツのあり方

(1) スポーツのあり方から (図1) 「プレイ」 - 「スポーツ」 - 「競技」 - 「戦争」

図1. プレイ-スポーツ-競技-戦争



そもそもスポーツというのは、「遊び (play)」です。やりたい時にやって、やめたい時にやめることができる"自由"さ、日常生活から離れている ("分離") ということ、そしてそこにはルールがある ("規則") ということ。こういった特徴をもった「プレイ」というのがまずベースです。ただやっているうちに、おそらく狭い

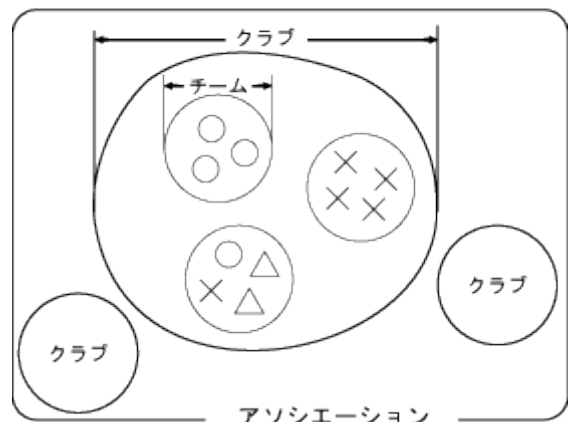
意味での「スポーツ (Sports)」、プレイそのものが楽しい、やめられない位楽しくなってくる段階があると思います。「競技 (Athletic)」というのは、さらにその先にある段階です。つまりプレイの結果、勝った負けたの部分が目的になってくる活動、それが「競技」です。勝利の為に必死になって己を犠牲にして時間とかエネルギーとか割いて、一所懸命やるのがこれです。さらに、大学で学んだのは、この先には「戦争 (War)」があるということ。国の旗を背負って戦う、例えばワールドカップ予選なんていうのは、おそらくこのような性格を持っています。これが一つの流れの中にあるということですね。

ただ一般的にはこれを全部ひっくるめて「スポーツ」と言っているので、例えば「スポーツって何？」って聞かれたら、「プレイ」を連想する人もいれば「競技」を連想する人もいる。運動部ではどうやら「スポーツ」ができるよ、と思って運動部に入ってくる者は、「プレイ」意識を持っている者もいれば、「競技」意識を持っている者もいる。それは当たり前のことなんですね。学校運動部で「戦争」やってるのはさすがにいないと思うのですが、こういう単位 (プレイから競技までを含めて) で学校の組織的な運動サークルが構成されているということ。これが一つ整理すべき大事な点かなと思います。

(2) スポーツ集団のとらえ方から (図2) 「チーム」 - 「クラブ」 - 「アソシエーション」

次にスポーツの集団をどのように捉えたらいいのかということ。従来我々が習ってきたし、学校運動部でやっていたのは、この多様な人の集まりを「チーム」として捉えていた。「チームしかなかった」と言ってもいいかもしれません。「チーム」というのはゲームを行う単位です。ゲームを行うとは、11人試合に出る人がいて、それ以外に出ない人がいる。出ない人は出る人を一所懸命サポートする。要するに補欠の美学というものです。「チームワーク」ばかり強調すると、方向性で言ったら「競技」志向に向かっていきます。するとこの辺の連中 (「プレイ」志向) の居心地が悪くなって退部する。自分が高校のときに体験した、下級生が退部していった事件というのは、まさにこういうところに構造的な問題があったということです。

図2. チーム-クラブ-アソシエーション

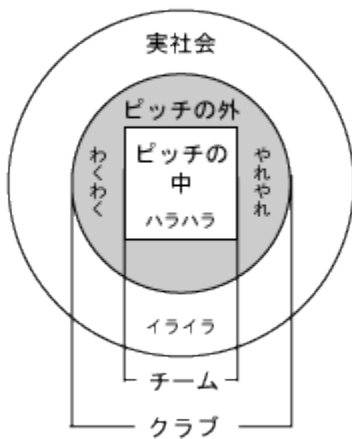


これもスポーツ社会学でよく言っているのですが、これは「チーム」じゃなくて「クラブ」だと。多様な人の集まりは「クラブ」なんだと。そして「クラブ」の中にレベルごと、ニーズごとの「チーム」があるという考えです。「クラブ」があってその中に幾つかの「チーム」があるという構造をイメージすれば、「100人のサッカーチーム」なんていう得体の知れない発想は出てこないはずですよ。サッカーは11人でやるわけですから、サッカーのチームは11人+ α 。ワールドカップだったら23人、高校生選手権だったら18人でしたっけ？（登録ですか？大会によって違うのですが20人前後です。）それが「チーム」ですよ。「100人のチーム」はあり得ない。野球の場合は9人+ α 、バレーボールの場合は6人+ α 、その競技の人数で決まってくるものです。そして同じチームの中のチームワークが重視されるわけですけど、同時にチーム同士のクラブワーク。これも本当は大事なことではないかと。

(2) スポーツ空間のとらえ方から (図3) 「ピッチの中」－「ピッチの外」－「実社会」

(3)

図3. ピッチの中-ピッチの外-実社会



クラブワークというのは一体どこで育まれるのだろうか？というのが、次のスポーツ空間の捉え方の話です。我々は普段「実社会」でいろんなストレスを感じながら、イライラしながら過ごしているわけです。そしてスポーツ空間へと入っていきます。これを仮に「ピッチの中」と表現したいと思います。「ピッチの中」では同じルールのもとで「プレイ」するわけですね。勝つか負けるかわからない、ハラハラした気持ちをここで楽しむわけです。つまりイライラ空間からハラハラ空間へ、ハラハラ空間からイライラ空間へ行き来しているのです。ハラハラする単位は「チーム」です。同じようなレベル、同じようなニーズを持っている人と集まって「チーム」を作って、似たような人達とゲームする。だから面白い。ゲームをやって10対0とか20対0というゲームだと全然ハラハラしない。面白くないですね。それはスポーツ的な観点からいうとミスマッチです。

だけど、イライラとハラハラを行き来するだけでは勿論ありません。我々は着替えます。更衣室とかそういう所で。そしてゲームが終わったら、大人だったら飲み屋へ繰り出します。高校生であれば、学校の近くに必ずある駄菓子屋へ行きます。最近だったらコンビニですけど。つまり「ピッチの外」。この空間で、イライラ空間からハラハラ空間に入っていく時にわくわくするわけですね。「さあ、今からやるぞー」。ハラハラ空間から実社会へ戻っていく時に、「ピッチの外」でやれやれするわけです。そしてわいわいやるわけです。この空間が実は「クラブ」を育ててくれる、「クラブワーク」を育ててくれるのだということです。

学校ですと一応サッカー部の部室というのがあって、そこが彼等のクラブワークを育む場になっているのですが、だいたい練習を3時半から5時半位までやって5時40分が下校なんで、「コラー、早く帰れ」と言わざるを得ないですね。だけど本当はですね、もっとゆっくりさせたいのです。スポーツが終わって、スポーツ空間のすぐ近くの部室で、たっぷり時間を過ごさせてやりたい。日本のスポーツ施設の作

り方、うちの学校の体育館もそうなんですけど、ご存知だと思いますが、生徒数で学校の敷地面積が決まってくる。そして、これだけの面積で体育館つくれるよとなると、学校の先生はじめ事務方の人はできるだけ広くスポーツを「する」空間を用意するわけですね。つまり「ピッチの中」をこれだけつくるわけです。すると「ピッチの外」はこれだけになってしまいます。確かにこれはチームを育て、スポーツを「する」側としてはいいのですが、クラブを育てる構造にはなっていません。欧米の施設の話などを聞くと、かなり「ピッチの外」にいろんなアイデアが施されていて、更衣室、シャワー室はもちろん、談話室、喫茶室がスポーツ空間のすぐ近くにある。だからクラブが育つのだと。これは施設の観点からなんですけど、そういうことが言えるのではないかというのが、スポーツ社会学を勉強してきた中で、また自分が経験してきたところと照らし合わせた時の捉え方です。

(4) スポーツとの関わり方から 「する」－「みる」－「語る」－「ささえる」

さらにスポーツとの関わり方でいうと、スポーツは「する」のが勿論中核なんですけど、「みる」関わり方、あるいはスポーツを「語る」、スポーツで「語る」、あるいはスポーツを「ささえる」、あるいは「ささえる」ことそのものがスポーツ、という多様なあり方がスポーツの捉え方として必要ではないかと。

(5) ライフ・マネジメントの観点から 「歯磨き感覚のスポーツライフ」「アマチュアに引退なし」最後にライフ・マネジメントの観点からいうと、単発的なトーナメント、どこかに集まって大会をやる、それに向けて直前に合宿を組むというスタイルではなくて、日常生活の中で、歯磨き感覚でスポーツをやり、歯磨き感覚で勉強もやる。そうすれば、途中で「引退」なんて得体の知れない言葉は出て来なくなると。アマチュアに引退なし。そういうところが本来のスポーツのあり方ではないかと。

(6) まとめ－これまでのスポーツからこれからのスポーツへ (図4)

整理しますと、我々が、これまでのスポーツからこれからのスポーツへ、言葉も意識も習慣も変えていく必要があるのだと。「チーム」単位で勝った・負けた、ばかりやっていて、それはそれですごく大事なんですけど、それだけではなくて、本当に育てなくてはいけなのは「クラブ」ではないかと。「選手」。選ばれた人です。それは、先程の話からも言えると思うのですが、本当は「プレーヤー」、自らプレイする場を主体的に選んでいく「プレーヤー」を育てていく必要があるだろうと。選手がいるということは多くの「補欠」が生まれるわけで、だけど「補欠ゼロ」のシステムが必要じゃないか。「競技志向」、「大会中心」、単発的な「トーナメント」じゃなくて、「多様なあり方」を認めて、「日常生活中心」、そうすると必然的に「リーグ」に行き着くわけです。週末に定期的にゲームが入ってくるリーグです。「引退のあるスポーツライフ」から、「引退なしの生涯スポーツライフ」へ、「単一種目を年中行う」スタイルから、「複数種目をシーズン毎に行う」と。リーグ期間がシーズンとして確定すれば、別のときは別のスポーツをするという関わり方が当然見えてきます。「する」のみから、「する・みる・語る・ささえる」、「単一価値観集約」システムから「多様な価値観」へ、必然的に「学校・企業」中心から「地域」に出て行こうと。こういう考え方がDUOリーグの原点になります。

これまでのスポーツ観		これからのスポーツ観
チーム	→	クラブ
選手	→	プレーヤー
多くの「補欠」を生むシステム	→	「補欠ゼロ」のスポーツシステム
「競技」志向	→	「プレイ-スポーツ-競技」多様なあり方
「大会」中心	→	「日常生活」中心
トーナメント	→	リーグ
「引退」のあるスポーツライフ	→	「引退なし」の生涯スポーツライフ
単一種目を年中行ふ	→	複数種目をシーズンごとに行ふ
「する」のみのスポーツライフ	→	「する・みる・語る・ささえる」多様なスポーツ
単一の価値観に集約するシステム	→	多様な価値観を認め受容するシステム
学校・企業	→	地域

図4. これまでのスポーツからこれからのスポーツへ

■■■ 3. DUOリーグの試み

(1) DUOリーグの理念

ここから、DUOリーグの具体的な話になってくるんですけど、まずはじめにDUOリーグの理念。初年度からカッチリ理念が文章化されていたわけではないんですけど、まずこの大項目だけは、わりと最初の年から明確にしていました。とにかくDUOリーグは、参加すればゲームができるよというだけじゃなくて、この理念を達成する為の方法がサッカーのゲームであるという考え方です。ですから一番大事なものは、この理念を理解して実践する事です。

一番最初に書いてあるのが「サッカーの生活化」。先程から言っていることで、日常生活の中にきちんとサッカーを位置付けていこうと。1週間のサイクルの中に位置付けていこう、勿論勉強とかも含めて、歯磨き感覚で位置付けてもらうというのが最初に書いてあることです。シーズンが明確になるとシーズンオフも明確になる。年中ダラダラやるのではなく、インシーズンとオフシーズンをはっきりさせることで、高校生の活動も1年間の流れが見えてくるだろうと。さらにこれを他のスポーツにも広げることで、スポーツのシーズン制、複数種目への関わりもできるようになるだろうと。3年間の高校生活の中にサッカーが無理なく続けられるような、アマチュアに引退なしを実践していこうじゃないかというのが、そもそもDUOリーグをはじめた原点です。

あとは定期的な試合の場の確保、レベルに合わせた受け皿づくり、人材の育成、こういう部分も非常に大事な考え方として掲げています。

(2) DUOリーグの誕生

そして近くにいる仲間に話をしました。「今こんなこと考えてるけど、乗ってこないか？」と。

筑波大学附属高校は、名前こそ筑波ですけど東京都にありまして、東京都の文京区です。文京区っていうのは都心で、グラウンドがない学校がいっぱいあります。たまたま私の勤務している学校はグラウンドもしっかりとれる所で、大会の会場になったりするんですけど、近くの学校ではテニスコート位しかスペースがない。けど部員はいっぱいいる。ではどうしているのかというと、週末の練習試合の相手を一所懸命探すわけです。その為に電話を、週に30校から40校かけ続けている先生もいる。そのエネルギーがものすごくもったいないなど。例えばグラウンドを持っているうちの学校とその学校とで同じリーグをつくれば、この施設をうまく使えるわけです。うちの学校で施設が眠っている時間もあるわけですから。そんなわけで、ご覧のような学校の先生に声をかけて、あと何人か声をかけて、本当にできるのかということカレンダーと睨めっこしてシュミレーションしてみました。

最初から考えていたのは、学校の1学期で1つリーグを完結する。2学期でもう1つリーグを完結して、3学期はオフシーズンとプレシーズン。4月から7月の間で週末が何回あるのかを数えて、そこから高体連やクラブユースの公式戦で取られてしまう日数を削って、さらに中間テスト、期末テストでだいたいどの学校も活動できなくなるのでそれを削ったら、まだ結構余裕があったんですね。10チーム位のリーグなら十分できるぞと。10チームということは9節、9週間。9週間位はカレンダーみると取れるんです。さらに10チームですと1節5試合。1日グラウンドが取れていれば、第1試合から第5試合まで全部消化できるからこれはいけるぞというようなことで、声をかけてやり出しました。

■■■ 3. DUOリーグの試み

(3) DUOリーグのあゆみ

★1996年度前期

そこから先は「DUOリーグのあゆみ」をご覧ください。96年、文京区と豊島区の学校運動部とクラブユースでDUOリーグが発足しました。初年度は10チーム1リーグ制です。この「チーム」というのは、加盟クラブ昭和一高(3)、昭和一高から3チーム出ているということです。筑波大附属(2)、この時筑波大附属から2チーム出ました。あとは小石川から2チーム、京華、向丘、三菱養和、クラブユースですね。つまり高体連だけではなくて、その年代を扱っている、志を同じくする指導者に声をかけたわけです。筑波大附属の2チームは、この時は3年生中心の筑波Aと、1、2年生中心の筑波Bの2チームつくりました。一番盛り上がったのは筑波ダービーマッチです。A対B。並行して高体連の試合もあるので、高体連の大会には筑波Aと筑波Bの連合軍が、学校ナショナルチームをつくって参戦すると。すると何となく強くなった気がするんですけど、実際は連合軍の方が全然まとまりがなくて話にならなかったんですけど、こんな形でやりました。それが初年度です。

★1996年度後期

ちゃんとできるじゃないか、面白いじゃないかということで、周りの学校もこの話を聞きつけてきます。

後期リーグからは学習院の高等科と豊南高校、両方豊島区の高校なんですけど、それも参加しまして、1部は各クラブの代表チーム、2部はその他のチームで、「変則1部2部制」でやりました。

「特別枠選手制度導入」、これはどういうことかという、96年夏、アトランタオリンピックの時に、23歳以下の中で3名までオーバーエージありでした。これなかなかいいぞ、ということでDUOリーグでも早速採用しまして、オーバーエージ3名まであり。これによって私も試合出場の方が確保でき、何試合か出ています。今年も1試合だけ出場しました。副産物として、オーバーエージを導入することで、浪人生がゲームに参加できる。浪人生がサッカーする場所は、この世の中にどこにも存在しない位過酷な状況だったんですけど、これがあることで彼らも時々学校に来て一緒に練習やって、一緒にゲーム出ると。こんなことができています。

この年の後期リーグは「文京区中3選抜が参加」。ご存知の様に中学3年生は、秋以降目標とする大会がなくなって、「引退」という得体の知れない言葉で「OB」と称しています。アマチュアなのに何故引退という言葉が存在するのか、それ自体が不思議でしょうがないんですけど、15歳がOB (Old Boy) を名乗っていることも不思議でしょうがないですね。そこで中体連の先生とも相談して、後期に中3選抜入れようとじゃないかと。これによって中3の子のモチベーションも維持できるようになりました。今では豊島区の中3選抜も、後期ですけどDUOリーグに参加しています。

筑波大附属と京華高校の2軍が「連合軍で参加」。京華高校はグラウンドがなくてうちはグラウンドがある。京華高校の先生はゴールキーパー出身でキーパーの指導ができて、こっちはフィールドの指導ができるということで、木曜日だけ一緒に練習しています。DUOリーグの2部にはその連合軍で出ようじゃないかということで、その後もこういった試みは所々出ています。

更にこの年度ですごく大きかったのは、「大会参加費を徴収」したことです。1チームにつきこの時は15,000円。今は18,000円にしているんですけど、要はいい活動を続けていく為には無償のサービスではダメだと。参加者の受益者負担ですね。これがまず原則だぞということで、こういう話をしたところ、指導者同士は勿論OKだと。それでうちの学校では部員に、後期から参加費を取るという話を投げかけたら、大議論になりました。

どういうことかという、まずうちの高校生は理屈っぽいのが多いんです。理屈にはちゃんと理屈で説明してやらないといけない。納得すると彼等もすぐ乗ってくるんです。「じゃあ席外すからお前等で議論しろ」ということで彼等に話し合いをさせて、しばらく経って行ったら、黒板に色々書いてあるわけですね。「領収書を発行せよ」とか「使用目的を明確化せよ」とか。その中で一つ、こいつ等こんなこと知らなかったんかと思ったのが、「高体連はタダなのに何でDUOリーグはお金いるんですか？」と。高体連はタダじゃないんですよ。彼等の財布からお金が出てないだけで、学校経由でお金はちゃんと出ているんです。東京都の大会でいうと、1大会あたり1チーム10,000円。まず地区大会10,000円、都大会に勝ち上がったら更にエントリーする時にプラス10,000円。こんな形でやってるんですけど、彼等の懐は全然痛まない。そこで彼等に、実は高体連の大会はこんな風にお金が出てて、こんな風に使われているの

だと。付き添いの大人とか審判やってくれた人にこれだけお金が出てると、どうだ！って感じで言ったけど、まだ納得しないんですよ。

だけど決め手になった言葉がありまして、それは、「おまえらな、1000円で7試合も楽しめるんやぞ！」と。つまり1チームあたり15,000円で1チーム15人としたら1人1000円ですね。で、8チームで構成しているということは7試合できるということです。1000円で7試合を楽しめる。例えばJリーグ観に行ったら1試合いくらだと。あるいは映画観に行ったら2時間でいくらだと。ディズニーランド行ったらどうなる？他のレジャーと比べて「するスポーツ」がこんなに安いのをどう思う？というような話をしたら妙に納得してくれまして、その場で彼ら1000円を1人ずつ出して、それ以来ずっと彼等の財布から出してもらっています。

勿論お金を集めるだけじゃなくて、仕事やった人にはお金を返すわけで、審判やってくれたら、めちゃくちゃ安いんですけど1試合3人で1500円、それから付き添う大人も1試合1チーム1000円、会場費1試合1000円、こんな形で計算しながらやっています。

DUOリーグでは当初から審判も高校生にやってもらうようにしています。高校生にとってみれば、1試合笛を吹く、あるいは旗を振ることで1人あたり500円のお小遣いがもらえるわけですね。これがモチベーションになっているみたいで、更にシーズン最後に各賞を表彰するわけです。MVPとか。その中に優秀審判賞というのも設けて、審判としてパフォーマンス発揮した人を表彰しています。これがかなりいいモチベーションになっていて、審判やりたいという人が出てきています。昨年度からは、DUOリーグ主催の審判講習会、東京協会から講師に来てもらって、リーグとして審判員育成にも取り組んでいます。

★1997～99年度

97年度は「よりよいサッカー環境を構築し、全国へ情報発信する」というテーマを掲げたところ、たまたまなんですけどJFAニュースー日本サッカー協会の機関誌に連載するチャンスがありまして、そこでDUOリーグの話を紹介することができました。

98年度から、今度はレベル別リーグという方向に向かっていきます。前期は均等に2つに分けてリーグ戦やって、とにかく1位から16位まで全部決めたんです。その順位をベースにして後期から上位8チームが1部、下位8チームが2部という形で、強い者から順番のリーグ構造をスタートさせました。この時に我が筑波大附属高校は上位8チームにぎりぎりに残ることができず、9位だったんです。AもBも1部に入るところもありました。シーズン毎に開く「DUO会議」で割り振りを決めるんですけど、「順位ごとに行きます」って言ったら、親切な先生が「うちのBは辞退するから、中塚さんとはよくやってるし1部に入ってよ」というような提案をして下さいました。けどここは譲れないですね。1部でやりたいのはやまやまだけど。1部2部っていうのは、強いのが上に行って、そうでないのが下にいるという明確な構造にしていけないと後々よくないぞということで、筑波大附属は2部スタートとなりました。もちろん入れ替えはシーズンごとにやっています。前期の順位をもとに、後期の1部2部を決めて、後期の順

位をもとに翌シーズンの1部2部を決める。こんな構造が98年、Jリーグに先駆けてやりました。

99年も同じような形で進み、この動きをもっと広げていこうというのを99年度中に考え、そして2000年度のモットーとして、「2001年度より東京都ユースサッカーリーグを創設すべく行動を開始する」という目標を掲げて、具体的にどんな行動を開始したらいいのかというのを考えました。

★2000年度

一つは自分達のリーグをより良いものにしていくためにいろんな制度を整備していこうということです。例えば登録とか移籍に関してはルーズなままやっていました。実は今もルーズなままなんです。けど、どうしていったらいいのかという議論はこの時かなりやりました。そういったことを整理するのに、「プログラムつくる」という話を先にしたんですよ。それが最初につくったこのプログラムです。プログラムをつくってお互いのことを理解する、つまりチーム紹介がある。それと同時に、このリーグが何かを理解してもらうために、読み物も掲載した。そしてDUOリーガー、高校生ですけど、彼等に1冊ずつ配ってしっかり読めと。自分たちが関わっているリーグがどういうものかをこれで勉強しなさい、というツールにしました。で、これをしっかりしたものにするために、いろんな制度を整備しようという議論をしたんです。

勿論これをつくるのにお金がいらいます。ですからこの年度、2000年度からは、チームごとの参加費だけでなく、DUOリーガーの登録料、要するに「会費」を徴収することにしました。

この構造はこういことです(図5)。DUOリーグは4月から7月までに前期リーグをやって、9月から12月まで後期リーグをやる。これには「チーム」が参加します。エントリーの単位は「チーム」です。例えば2月に審判講習会やります。エントリーの単位は「個人」です。だから「個人」から審判講習会の「参加費」をとります。リーグに参加するのは「チーム」だから、「チーム」から「参加費」をとる。小石川高校から3チーム出たら、3チーム分、小石川高校という「クラブ」からもらうのです。これだけだったんです。これはDUOリーグの事業で、「事業費」ということです。

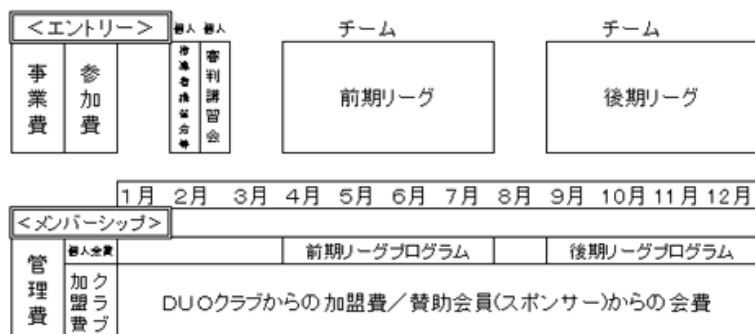


図5. メンバーシップとエントリー—DUOリーグの会計構造
 注)各事業へは参加単位(リーグならチーム、講習会なら個人)ごとに「参加費」を払って「エントリー」する。それが「事業費」である。各事業は独立採算が原則。組織をささえるための「管理費」は、DUOリーガー(選手からの「会費」やDUOクラブの「加盟費」、あるいは主旨に賛同する賛助会員からの「会費(スポンサー料)」から捻出される。このようなリーグ(中間の「メンバーシップ」が組織をささえる力になり、この部分をより一層強化したい)今後の課題)。

ここにプログラムをつくらうという話が出てきたのです。今、そこに置いてあるのは、1冊 400 円で販売しています。そういう事業と捉えることもできます。その部分もあるのですがむしろ、プログラムはメンバーの証だと捉えました。DUOリーガーは1年間通してメンバーです。会費を1人 500 円払ってメンバーとなり、その証として、前期プログラムと後期プログラムが手元に届きますよと。こういう風に捉えたんです。

単純に考えると赤字になるのはおわかりだろうと思います。たまたまりーグ参加費の部分で余ったお金があったので、それを初年度はプログラム代に補填しました。でもこういう赤字構造ではダメだ、更にこの部分を強化しようということで、本年度から「クラブ」の「加盟費（会費）」を、1クラブ 5,000 円徴収することにして、これでベースの部分をつまなうことにしました。つまりこれが、分類でいうとDUOリーグの「管理費」です。最終的にはここをもっともっと強固なものにしていきたい。組織的にも財政的にも、DUOリーグを年間通してささえてくれる、例えば専従スタッフが雇える位の強いものにしていきたいと。

「2001 年度より東京都ユースサッカーリーグを創設すべく行動を開始する」、そして「リーグ戦のプログラムをつくる」、という話が出た時に、話はここまで広がりました。つまり、DUOリーグのメンバーは誰か？ということ。メンバーは「クラブ」であり「個人」です。エントリーするのは「チーム」です。チームはその都度変わってかまわないけど、DUOリーグの仲間、すなわちクラブや個人はずっと仲間ですよ、こういう仕組みを考えました。この仕組み自体は、本当はサッカー協会でもらいたい仕組みですし、本来のスポーツからいうと、これが普通だろうと思います。今、日本サッカー協会の登録制度は、チーム単位の年間登録。「1年間私はこのチーム」と年度当初に決めたら、基本的にはずっと1年間そのチームです。今、協会の方ではクラブ登録という枠組みも視野に入れているみたいですが、本来は、メンバーシップとエントリーを整理して考える必要があるのではないかと思います。

DUOリーグのあゆみをもう少し続けます。2000 年度にはプログラムをつくっただけでなく、前期に1年生だけのフレッシュマンリーグをつくり、審判講習会を始め、DUOリーグ選抜の活動を徐々に始め、そして、ここまで勝手にチェアマンを名乗ってチェアマン兼事務局長で私が全部やってきてたわけですが、業務を分けました。広報担当と競技担当、会計担当に分けて、各事業も担当を決めてやるようにしました。これが 2000 年度のことです。東京協会への働きかけも同時に行い、2000 年6月の理事会で、東京協会としては、公認のユースサッカーリーグを立ち上げる方向で準備を進めることになりました。

★2001 年度

その後、協会レベルでは具体的には動き出せていないので、2001 年度に高体連のメンバーに声をかけて、東京都8つの地区からユースリーグ準備委員（仮称）を選出してもらい、私がチーフになって東京都全体に広げていく議論を開始しています。それが 2001 年度の「ユースリーグを早期に実現すべく行動を継続する」という話です。2001 年度の目標はもう2つ。「DUOリーグ"IT革命"元年とする」。これはホー

ムページをつくらうということなんですけど、ようやく I T 革命が勃発、11 月 28 日にホームページができました。 <http://www.d2.dion.ne.jp/~makotomo/index.html>

更に、「"F C D U O"構想の可能性について検討する」。これはまた後程話します。 というようなことで、ここまでざっと歩みを述べました。

■■■ 3. DUOリーグの試み

(4) DUOリーグの運営

具体的な運営は、まず各リーグの始めに、各クラブに基礎調査をします。日程の調査や何チーム出るのかという希望を聞き、そしてスケジュール表をつくります。使える会場は筑波大附属、小石川、本郷、学習院高等科、京華、三菱養和。これに今年度からは東京大学Bチームも加盟したので東大農学部のグラウンドも使っています。そして8月31日から12月21日までリーグ戦をやって、だからまた明日リーグ戦があるんですけど、12月23日を最終日と設定しています。

で、組めない試合があるんです。それが欄外に出ている試合です。どうしてもお互いのスケジュールをみると組めない。けどやってもらわないとしょうがないので、この試合は互いにグラウンド見つけて、最終日までに消化して下さいという形で投げてるわけです。リーグに入ることはリーグ運営の当事者になることでもありますから、試合をこなす義務があります。自分達で時間と場所をつくって、お互いで連絡してゲームをやる、こんな形で進めています。

お金の話は先程申し上げました。次のページにあるDUOリーグ通信 No.25、これは最新号で、12月6日に作ったものです。毎回こういう通信を作って各クラブにFAXで流して、各クラブの指導者がメンバーに印刷して配るということです。やはり、FAXやEメールなどの通信手段が進んできたからできるのだと思います。いちいち封筒に詰めて郵送することだったらたぶん長続きしないだろうと思います。

DUOリーグ通信は各クラブに送るだけではなくて、例えば池袋のサッカーショップ加茂やB&D、要は生徒達が行きそうなスポーツ店にも送っています。スポーツ店の方ではこれを掲示してくれて、セリエAとかの結果が貼られている隣にDUOリーグの結果が出て、「あー、僕の名前が出てる！」というのを彼等は楽しみにしているとスポーツ店の人から聞きました。意外とスポーツ店の掲示板は情報を伝えるのに有効な手段だなと考えています。

おまけですけど、スポーツ店の掲示板にDUOリーグ通信が出ているのを中学生の親が見るらしくて、中学生が買い物に来てる時に親も一緒に来て、「郁文館高校ってサッカーやってるんだ、豊島学院ってサッカーやってるんだ」というのを親が見ると。で、親が見て、子どもの進路選択に「DUOリーグに関わっている高校」ということで受験させるケースがあるということを知っています。

今やっているDUOリーグは第12回になります。1年に2回ずつやってます。1部は今のところ東京大学が全勝で、ぶっちぎりの優勝を果たしました。2部は、今期はチーム数が多かったので、DとUとOの

3つのブロックに分けて、後でプレーオフをやる形にしていますけど、筑波大附属は、非常に際どかったんですけど2部Dリーグで勝ち点10、得失点差プラス3で優勝。唯一の黒星のこのゲームに、私が特別枠選手で出てました。ちょうど部員がケガとか病気とかで11人揃わなくて。私もしょうがない、出るぞって感じでやったらこんな結果で。

スケジュール表が出ていますが、12月23日が最終日です。DUOリーグスペシャルマッチとか、DUOリーグ選抜の研修会の後でプレーオフをやりませう。これも色々考えたし、皆で意見交換したんですけど、結局シーズンははっきりさせるために、この日が最終日ということ優先しました。プレーオフというゲームをきちんとやるのではなくて、この日がラストということ優先して、その結果20分ハーフの変則マッチをこの日のうちに終わらせてしまうと。こんな形で2部上位2チームを決めて1部と入れ替える。その辺りのやり取りが、今見てもらっている一番最後のページにあります。

ということで、ざっとDUOリーグの試み、DUOリーグの6年間という話と、東京都ユースリーグの創設に向けての話の触りの部分だけさせて頂きました。だいたい1時間位しゃべったんで、ここらで質問を頂きたいと思うんですが、いかがでしょうか？

<ディスカッション1>

(発表者の発言は「○」で表示、その他は「●」。小見出しは「★」)

★東京都ユースリーグのイメージ

●DUOリーグの優勝チームが東京都全体のもう1つ上のリーグに行くようなことはないのですか。○今つくろうとしています。では今やろうとしていることをもう少し話させて下さい(図6)。今、DUOリーグは1部があって、今シーズン2部がDとUとOがあるわけです。1部と2部がつながっていて、1部で完結してるんです。今、東京都高体連のユースリーグ準備委員会(仮称)で検討して、この9月から各地でプレリーグをやってもらっています。DUOの理念と活動をモデルにして。ですから、DUOレベルのリーグが、試験的に8つできているわけです。今何をたくらんでいるかということ、この上をつくりたいんです。近いところ同士くっついた上位リーグを。DUOだけでみると、初年度から足立区の学校が入れてくれと言っていたんですが、それをずっと蹴散らしてたんです。これは文京区と豊島区だから、足立区のチームは入れないよ、やりたいのなら自分達でリーグをつくりなさい、作り方はこうだから。そして今、足立区でやっているんです。けど、ここだけでも飽和状態。DUOのトップレベルのチームはそここのレベルに達しつつあるんで、本当はもう少し強い者同士やらせてあげたい。で、これを下からつくって上へ上げていきたい。2003年度くらいをめどに上位リーグをつくって、これも1部2部構造みたいな感じにして、更に東京都全域の都ユースリーグ、これも1部2部です。今私の頭の中でイメージしているのは、各リーグの単位は全部8チーム。8チームだったら1学期の間に全部ゲームができます。というイメージで下から順につくっていきこうと。で、更にこの上がありまして、関東ユースリーグです。これは2002年度から始まります。関西ではもうやっておられるんですよ。ご存知だと思いますけど、日本

協会的な動きでいうと、先に9地域リーグをつくって、その下はそれぞれのところでやって下さいという話なんですけど、日本協会の動きと最終的にはドッキングした形に持っていきたいなと思います。

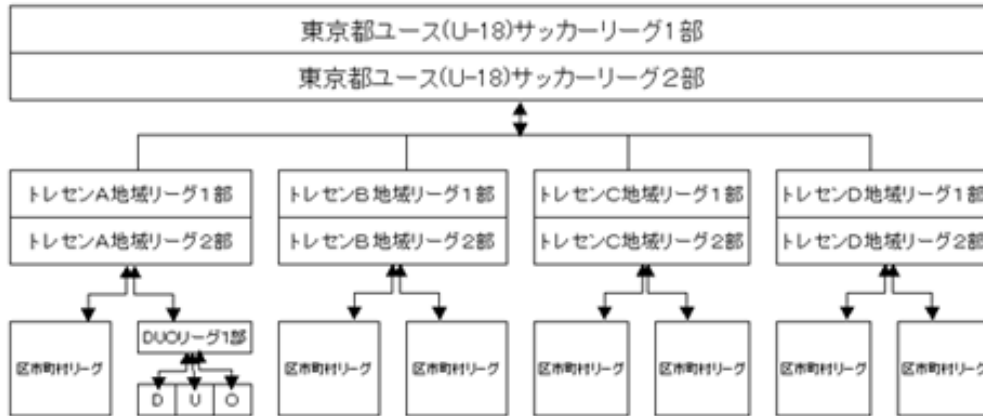


図6. 東京都ユースサッカーリーグのイメージ(案)

注)①はトレセン地域リーグをA, B, C, Dと4地域として描いているが、実際には東京都は7地域で動いている。区市町村リーグの数も実際とは異なっている(今後の検討課題)

★協会や高体連との関係

●協会登録していないチームと高校生チームが試合して高体連はうんというのですか？

○全て協会登録しています。東大の部員も登録しています。1種登録です。1種と2種がここでゲームをやっていることに関しては変則的な形ですね。今、僕等がここでやっているのは、あくまでも練習試合の組織化なんです。それをオフィシャルな流れに乗せていくところで課題が次々に出てきているということです。ある地区であったんですけど、部員が11人しかいない高校がプレリーグにエントリーしてきて、この11人の高校と別の高校が初日にゲームをやりました。ところが、11人しかいない高校の部員が前日に1人学校をやめてしまって10人になって、更に当日ゲームが始まったらケガで9人になって、最終的には8人かそんな人数になってしまったらしいんです。8人対11人のゲームをやりながら、その同じ会場には部員200人の高校が、ゲーム出たいなって言いながら見ている。そういうことが最初にあったもんですから、選手の貸し借りはその場で考えて大目にやろうじゃないかということがこのリーグの中での取り決めとして出たらしいんです。けどそれは、オフィシャル化した時に認められるかという話なんです。実は前回のサロンの月例会でこの話を取り上げて、今言ったような問題点も出てきたんですけど、どこかで整備していかないといけないと。で、それはFIFAのルールをそのまま末端まで下ろすのではなくて、例えばどこかで線を引いて、ここより上はきちんとオフィシャルで、ここから下はある程度はローカルルールありじゃないの？っていう緩やかな構造にしていかないと、埋もれている人口を発掘することはできないのではないかと。そんな話がこの間出ました。これからの課題ですね。

★登録・移籍について

●練習試合の延長線上でという話ですけれども、これがすごいヒントだと思いますが、例えば部員の少ない学校が2つ寄せて試合出るとかですね、ある意味移籍という考えでおられるわけですよね。高体連で、例えば神戸高校の生徒がふきあい高校に、そこで試合するなんて兵庫県では考えられないことだけど、一方で、一番最初のスポーツ観という話からいうと、非常にスムーズに、そういうことをやって何がおかしいの？普通じゃないのということになるわけですよね。これまで学校で我々がやってきた部活で、中学も高校もチャンピオンシップのみを目指してサッカーをしてきたと。そういう価値観から、もう少し違った価値観で子ども達がスポーツをやるような時代になって来ているよと。それを今ここで現実的に、オフィシャルじゃないけれども、ちょっとオフィシャルに近いような形にしてやってやると、子ども達が非常にいきいきとスポーツをやり出した。そういう風を感じた。こっちの学校の先生が嫌だったら、あっちの先生のところに行ってサッカーしたいというのが、ひょっとしたらあってもいいのかもしれない。DUOリーグやっている中でそういうのありませんか？よそのチームで出てみたいという子どもが出てきたことは？

○そういうのを、むしろこっちとしては奨励したいと思っています。よくある話だと思うんですけど、ゴールキーパーは1つしかないポジションですよね。ある高校に優れたキーパーが2人いると、どちらか片方しか出られない。すごくもったいない話ですよね。別の高校ではゴールキーパーがいないからフィールドプレーヤーがやっている。これすごく人材の無駄だと思うんですよ。だから例えばDUOリーグの時はあっちの高校で出て経験積みなさいよということを本当は奨励してどんどんやりたい。これはキーパーだけじゃなくて、この子とこの子を組ませたらすごくいいコンビネーションができるんじゃないかという発想も含めてね。まだそこまでいってないです。というのは日常のトレーニングがそれに追いついてないから。

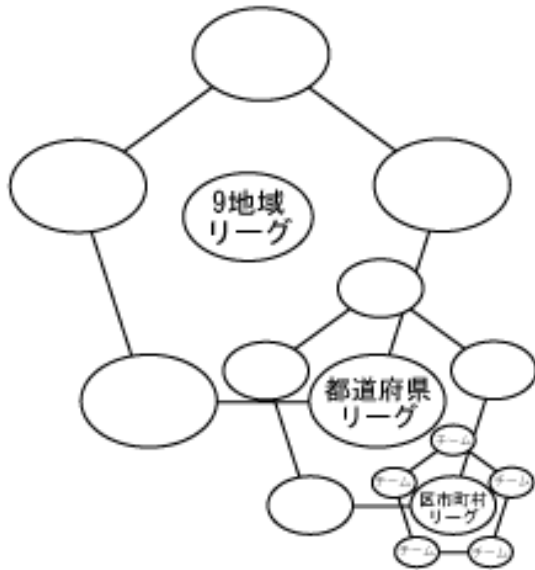
★シーズン制についてー"衛星型サッカー環境"とフットサルを含めたスポーツライフのイメージ

●DUOリーグに加盟しておられる所は日本協会に同時に登録しているのですか？

○すべてそうです。

●ではDUOリーグをこなしながら、一方高体連の試合にも出ている。

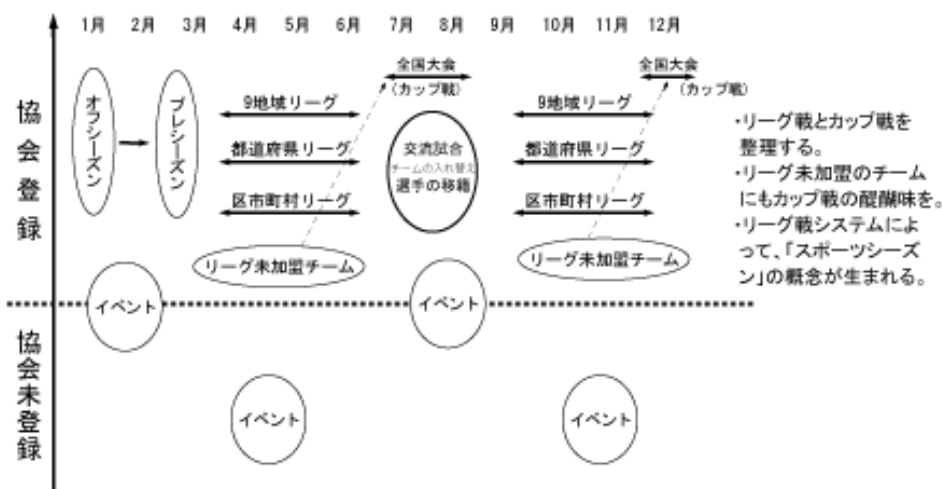
図7. 衛星型サッカー環境試案



- ・定期的に試合ができる「リーグ戦」を地域ごとに行なう。
- ・レベルに応じて階層的にリーグがある「衛星型サッカー環境」。
- ・選手の移動やチームの移動を柔軟に考える。
- ・一つのリーグは日常的なサッカー活動の単位であり、かつタレント発掘の単位でもある。
- ・地域にあったやり方で、無理なく行なうことが大切。

○全くその通りです。最終的につくりたいイメージは、一つは「衛星型サッカー環境」と僕ら呼んでいるんですけど、底辺は近い者同士で、強くなったらより広いエリアでゲームをやる構造です（図7）。図6を別の角度から書いたのが図7です。その次にですね、シーズンをはっきりさせようと。4月から7月はリーグのシーズン。9月から12月もリーグの期間。そしてその合間にカップ戦がある。例えば8月にインターハイがあると、で、リーグをやりながら、インターハイの予選をノックアウトシステムですずっとやっていく。こういうのは十分可能じゃないかということですね（図8）。

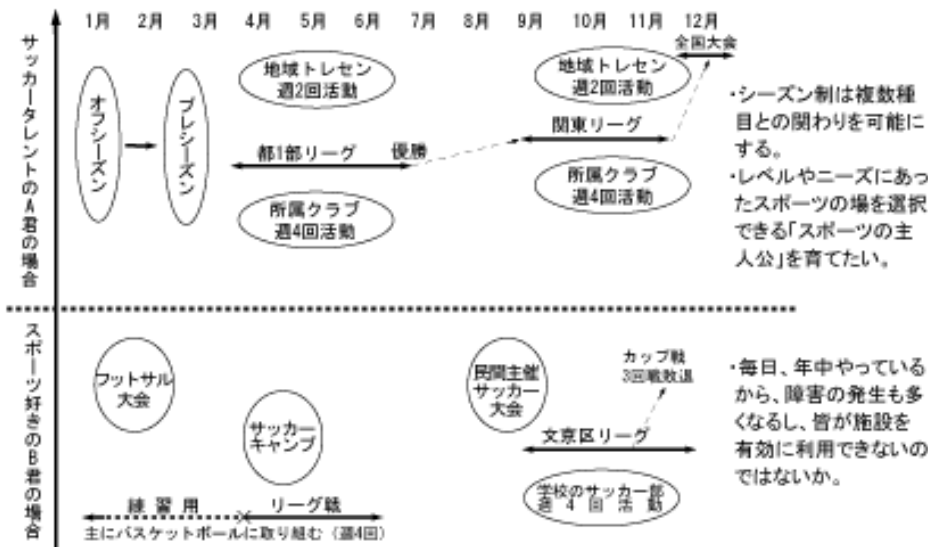
図8. イベントシステムの例（ユース年代）



更に、これが他の種目にも広げていけばですね、例えばサッカータレントのA君は年間通してサッカー中心に活動すればいい。それも自分のレベルに応じたリーグに、場合によったら移籍して活動すればいい

い。スポーツ好きのB君はサッカーだけをやりたいわけではなくて、いろんなスポーツをやりたいわけです。前期は例えばバスケットのリーグに参加して、後期はサッカーのリーグに参加する。こういうイメージができるのではないかと（図9）。

図9. 個人のスポーツライフの例（ユース年代）



これをもう少しきちんとつくったのが「2010年のサッカー環境構想（中塚私案）」（図10）です。レベル別リーグが同じ時期に行われている。同じ時期にというのが大事です。ダラダラやって順番に上がっていくというスタイルじゃなくて、そのシーズンは例えばブロックリーグでやる。次のシーズンは都道府県リーグでやる。勿論チームの降格、昇格はあるし、移籍ももちろんあるんですけど、シーズンを統一させることが大事だと。カップ戦が並行していたり。更に、今考えているのが、フットサルの活動をこれからまかせていけないかということです。たまたま私が東京都のフットサル委員として2種を担当してまして、今年の夏に2種のフットサル大会をやってみたんです。A4の冊子をご覧ください。「第1回東京都ユース(U-18)フットサル大会報告書」。冠に「第55回社会を明るくする運動」がついています。これは夏のラジオ体操をやったりしながら非行少年を健全育成してあげようという団体でして、こういうのがつくことによって体育館が借りやすくなる。そんなこともあって小金井市の体育館を借りてやってみた。実は東京の場合、お正月の高校選手権の予選が8月の終わりから始まるのです。トップレベルの人たちは冬の選手権なんですけど、下々は夏の選手権です。8月初旬は東京都の高体連全てが選手権に向けて活動しているときです。だから8月4、5日に体育館が取れて2種のフットサル大会をやるよと言っても、11人制のサッカーをやっているところはほとんど出られません。じゃあどういうところが出てきたかということ、普段からフットサルやっている連中や各学校にフットサル同好会が出てきているのでその同好会の連中、あるいは一番ユニークなところでは、体育の授業でサッカーを選択した連中がチームを作って、体育の先生が引率者で出てきた、そういうのがありました。来年以降も8月に大会をやって、フットサルを主にやっている者を対象にしたイベントでいこうと思っています。来年の2月にもう一つユースのフットサル大会をやるんですけど、これはターゲットがちよっと違います。フットサルだけやっ

ている人ももちろんOKですけど、サッカーの子は、リーグシステムが全部でき上がるとオフシーズンです。オフのトレーニングでフットサルをやらしてもらおう、ということでうちの学校では、DUOリーグが12月23日に終わって1月アタマからオフシーズンからプレシーズンになります。11人制のサッカーよりむしろフットサルを徹底的にやろうと思っています。

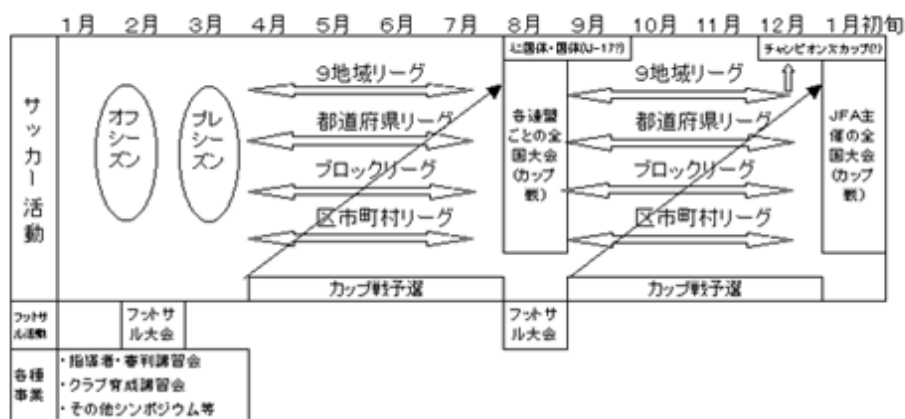


図10. 2010年の「イベント」と「シーズン」のとりえ方(中塚試・私案)
 注)リーグ期間がシーズンである。シーズン中はレベルに応じたリーグをベースとしながら、ノックアウトシステムのカップ戦もある。リーグには加盟せず、カップ戦にだけ参加するチームもある。オフシーズンにはフットサルの大会もある。このようなイメージが想定できる(あくまでも試案・私案である)

★オフシーズンの過ごし方

●オフシーズンって言われていますけど、現実的に1月中は練習があるそうですが、体を休めるというオフシーズンは作られているのですか？

○トレーニングの中身は変えています。1月中は持久力トレーニング、ロングランなど時間が結構かかるもの。1月中は練習試合などを組まない。

●私は整形外科に居ります。12月から1月になると学校の体育の授業でロングランなどの持久走をやっていると思います。授業でもやって部活動でもやることは、私どもは医学的に言えば良くない。その辺は体育の時間とかの考慮が必要だと思います。

○おっしゃるとおりだと思います。私は体育の教員なのですが、うちの学校では体育の授業で持久走をやらないので、そういう点では問題ないと思います。

★学校との関係ーリスクマネジメント・学校施設の開放について

●私も5年前は高校の体育の先生、またサッカー部の顧問でした。最初の頃は勝つことが子供たちにとって一番。モチベーションを高めていくだけではなくて、子供たちがこれからサッカーを続けていくためにも一番いいことだろうと思っていました。走らせて、蹴って、強くなればいいんだというような形で指導しましたが、たくさん部員がいた学校で、彼らはいつも試合の日には朝早くから来て、10分ほど試

合に出て帰るだけなのですね。この子達にもサッカーの楽しさを教えてあげなければいけない、どうしたらできるだろうかということで、練習試合をしたときには、レギュラーの子とは別にその子達の試合をできるだけたくさんして、自分自身もその子たちの試合を見てやって話をしてやらないといけないということしか目が行かなかったですけど、先生のこういうDUOリーグの話を聞きまして、これはすごいなど。試合に出られない子がいかにして、いかに目標を持ってこれからもサッカーを続けていけるように、そういうことをやらなくてはいけないなとつくづく思いました。先生の話を知ることによって、サロン2002の報告があるのを見まして、いろいろ聞きたいことがあったのですが、今お話を聞いたらずいぶんいろいろわかってきまして本当にありがとうございました。学校の中での生徒や、生徒の試合について出て行く時の扱いというのはどういう扱いになっているのですか？ いろいろ話をお聞きしていたら審判員のお金も出ている、付き添い手当てもDUOリーグから出ているということは、もう完全に社会体育の一貫としてやられているのかなと思うのですが。

○方向性は間違いなく社会体育というか、地域スポーツの方向に持っていきたいと考えています。ただ現状は、例えば事故があつてけが人が出た場合、どこで補償するのかというと日本体育・学校健康センターの災害給付金です。つまりそれは部活動としてやっているということで、逃げ口上ですね。

●例えば高校とは違うところで試合をして、大学生とやってけがをしたということになると、先生の責任、又は校長の責任になるのでは。例えば傷害保険に入ってやるとか。登録の問題は、全部協会に登録して、それとは別にDUOリーグの登録としてやられているということで、完全に独立してやっているわけではないということはおわかりました。東京にはグラウンドがあまりない学校が多いということ踏まえ、グラウンドがあるけれども外でやる活動に、例えば社会体育の一貫としてやるならば空いている時間しか使えない。学校教育の中でやっているもので優先的に使わせてもらっているのですね。

○その曖昧さのおかげでうまくグラウンドが取れているし、リーグとして保険に入らなくても対応できている。これがオフィシャル化して完全に学校から切り離れたスポーツということにしていくと、今おっしゃったような問題も解決していかなければいけない。学校の先生方への理解というと、本校の教官研究会で過去3回くらいDUOリーグの話題や筑波大学附属高校サッカー部の試みを先生方にこんな感じで話させてもらって、理解してもらおうようにしています。ですから教員仲間で「おまえ何やっとなねん」という声はないですね。

●このあとの筑波大学附属高校のサッカー部がどうなっているのか、これも非常に興味を持っています。いま生徒が減ってきて、専門の指導者がいなくなってきた中で、興味あるけども部活の中でなかなかできないような状況がある中でどういうクラブ運営をしていったらいいのか。

<プレゼンテーション2－筑波大学附属高校サッカー部の試み>

では筑波大学附属高校サッカー部の試みについてです。お配りした資料の中では「ユース年代にリーグ戦を」という後に、「スポーツの側から学校運動部を見直そう」という、これは『体育科教育』という雑

誌に書いたものなんですけど、これを見ていただければ大体概略はつかんで頂けるかなと思います。

■ 1. 引退なしのスポーツライフ

改革1からいろいろあるんですけど、とにかくまず生徒たちが「引退」と言っている言葉をまずなくす。「アマチュアに引退なし」。うちの学校ではどの部も毎年6月の頭に予定されている学習院との総合定期戦を最終目標としています。これはかなり歴史のある行事で、古くは嘉納治五郎の柔道のころからお付き合いがあって、柔道で定期戦が始まって野球で始まって、今では全部の種目に広がって学校行事になっています。レベル的にはともかく、例えばバスケの試合では体育館に両校のクラスメイトが押しかけて、これはNBAかというくらい盛り上がります。それがイベントとして大きすぎるものですから、また、3年の6月ということもありまして、たいていの部がそれで「引退宣言」して受験シフトに切り替わるというのがうちの学校のパターンです。

それを変えようというのが最初です。つまり、高校サッカー的に言うと、お正月の選手権まで高校3年生が出られるわけですから、出られるとこまでずっとやろうと。そしてずっとやるにはまず自己管理・自己観察の必要があるので、QC（クオリティ・コントロール）シートというのをつくって、これを毎日つけてみよう。そして、生活の中にスポーツと勉強を位置付けて、3年の夏になっても親に文句言われないような態勢を、1年のときから両立してつくっていきましょうというのがテーマです。ですから活動の評価は、3年の夏の大会に何人の部員がチャレンジして、そこでどのような成果を上げることができたかです。DUOリーグ発足というのは、ある意味それを実現させるための方法であるわけです。週末に定期的にリーグ戦がある。うちの部活は週4日と決まっています。月、水、木、土、週末のゲーム。これを続けていくことで、1年生の春から3年生の12月までゲームができるわけです。もちろん3年生になったら練習日数が減ってもいいと思います。

DUOリーグの創設が改革2です。

■■ 2. クラブ化の進行

改革3と改革4をまとめて説明します。筑波大学附属高校サッカー部という集団がここにいます。これは筑波大学附属高校の生徒の中でサッカーが好きな奴の集団ですけど、はっきり言ってサッカーが好きな者が皆入っているかというところじゃないです。サッカー部っていうのは、サッカーが好きな者の中で週4回の練習にちゃんと参加して、与えられたノルマをこなして一所懸命やる奴がサッカー部員だったのです。昼休みにコート面に出てボール蹴って遊んでいるサッカー好きは、サッカーは好きだけどサッカー部のメンバーではなかった。

(1) サッカークラブ内にアスリート部門とフットサル部門誕生

ある時、競技志向のサッカー部で一所懸命やっていくにはついていけないけど、サッカーはやりたいたのでフットサル同好会を作りたいと言ってきた者がいました。彼はサッカー部を退部して、クラスメイトを集めてフットサル同好会設立の呼びかけをします。うちの学校の決まりで、その種目の人数そろわ

ないと同好会を名乗ることができないので、フットサルは5人ですから、5人で同好会やりますと宣言したんです。これもうちの学校の決まりで、公開練習45日間というのがありまして、公開練習を始めたんです。サッカー部がグラウンドで練習している脇で、フットサル同好会5名が細々と練習開始したのが97年だったですかね。

ところがこれを言い出したのが5月6月で、だんだん暑くなってきて、仲間がなかなか増えていかない。5人で何ができるか？2対2とか2対3です。暑い中でかなりハードなフットサルをやってぜんぜん楽しそうじゃないのです。そのうちこれが4人になり3人になり、45日間の公開練習の間に消滅してしまいました。

消滅してどうなったか。言い出しっぺの彼を呼んで長続きしなかった原因を探り、「この動きを何とか別のやり方で復活させようや」という話をしました。サッカー部は当初から「サッカーが好きな者」の集団ということ部員資格のまず最初に掲げていたんです。その次に「練習に欠かさず出てくる」とかありましたが、原点に戻ったらサッカー好きの集団です。「サッカーが好きな者は皆仲間やないか。サッカー部（サッカークラブ）の中にフットサル部門を立ち上げる動きを今の部員に呼びかけてみ」、ということ話を話してみたいんです。

彼はサッカー部のミーティングで、サッカー部を辞めてこういう活動をしたけど長続きしませんでした。その原因はいろいろある。仲間を増やすことをしなかった、増やし方のノウハウもなかったと思うのですけど。そして、「サッカー部はサッカーが好きな人の集団だからもう一回仲間に入れてください。僕は競技志向の活動はしないけど、プレーを楽しむ活動を育てていきたい」とそんなことを言いました。例によってうちのサッカー部員の理屈っぽい連中はゴチャゴチャ言うわけですよ。おまえ辞めたくせにまたやってきてえらそうなこと言うな、俺たちにな何のメリットもない、というようなことをいろいろ言って否定的でしたけど、僕が合間合間に「チームとクラブ」の話とか、「プレイスポーツー競技ー戦争」の話などをいろいろしてやって、これからのスポーツのあり方みたいなレクチャーを挟んでやると、連中も「クラブというのはなかなか面白そうだ」というように思ってくれたようでした。結局どうなったかという、11人制のサッカーを競技者としてやる「アスリート部門」とレジャー志向の「フットサル部門」、それら全部含めて「サッカークラブ」と呼ぼうぜ、という感じになったんです。

(2) 校内フットサル大会の開催

これに関連していろいろあるのですが、まずフットサル部門の活性化の話でいうと、98年のフランス大会のとき、6月くらいに昼休みサッカー人口がすごく増えたんです。部員でも何でもなくても、夜中のテレビを見て、やりたいなって思った奴が増えました。

よし、これはチャンスやということで、そのフットサルの言い出しっぺの子に、「一般生徒を巻き込んだフットサルワールドカップを開いたらどうか」と言ってみました。そして、98年の6月に第1回桐陰フットサルワールドカップが開かれたんです。すごいですよ。男子20チームで女子10チームが毎回出てくるのです。これが今日まで続いています。毎年6月と11月に年2回。ずっと続いていて、毎年こ

れくらい出てきます。加藤さんがうちの学校に来られたときにちょうどやってましたよね。昼休みにグラウンドにコート3面つくってそこでやるのですが、うちは昼休みが他の学校より長いので、生徒は早弁して昼休みが始まったとたんグラウンドに出て行って、そこで2試合消化できるわけです。2試合×3コートですから、6ゲームが1昼休みで消化できます。「グループリーグ」と「決勝トーナメント」、とは言わないですね。「ファーストステージ」「セカンドステージ」「ファイナルステージ」。そういうイベントをやっています。運営は全部生徒がやります。

(3) アスリート部門の苦悩

もう一つの副産物は、これはマイナスの方なんですけど、アスリート部門が減ってくんですね。というのは、集団内の周辺部は、どうやっても存在するんですよ。どうしようかな、しんどの嫌やな、っていう連中が。以前は「チーム」の連帯感で何とか皆を競技の方に持って行ってたんです。

けど、僕の指導もちょっと変わったんです。以前ほど引き止めなくなった。「考え方が変わったのか。それやったらこっち(フットサル部門)を選ばええ。そして、レジャーのスポーツを活性化させよう」。そんなことを言いながら快く送り出していたら、そのまま池袋に遊びに行ってしまった…。

東京というのは楽しいところが一杯あるんですよ。だからフットサル部門を活性化する方向に向かう訳でなく、ただ厳しいところから去っていっただけだったと。結局12人になってしまって、最後にゴールキーパーまで辞めてしまって、11人でゴールキーパーなしという悲惨な状況に陥って、そして改革6に至るわけです。

曜日制部員制度の導入。週4日ですらしんどの連中がいるわけです。塾行ったり、他の習いごとに行ったり。だけどただの遊びじゃなくて、週1日でも2日でも厳しいサッカーに関わりたい、そういう子を仲間に入れようっていうことで、ミーティングで話し合っ、曜日制部員を募集したんです。もちろんサッカー部だけで決められることじゃないから、生徒部の担当の先生とも話して、了解を得て、曜日制部員制度を導入した。その時のチラシが、ここに書いてある手書きのものです。生徒が作ったやつですけど、「シーズン制、曜日制サッカー部員募集」。下に大きく書いているのが、ちょっと情けないですね。「サッカー部は今部員12人で大変困っています。お願いします。少しでも興味のある方、見学だけでもかまいません。お近くの部員まで、気軽に声をかけてください。ゴールキーパーも居ないので募集しています」。こんなのが校内に張られて、そして曜日制部員が何人か入ってきました。月曜日に。月曜はうちの学校4時間で授業終わるんで余裕がある。で、しのいだ。

その代わり、これもまた後日談があって、月曜練習というのは僕が練習に出られない曜日なんです。教官会議が午後からあって、部員だけで運営しているところに曜日制部員として月曜だけやる連中が入ってくるわけですよ。その時の部員の力量もあるんでしょうね。月曜日の練習の質が低下したっていう議論になるわけです。で、その原因を曜日制部員に押し付けるわけです。「俺たちはアスリートだ。週1回だけやってくるお前たちがいるから俺達の活動の質が下がるのだ」と。「それは違うやろ。お前らが何で活動の質を下げなあかんねん」。そういうことを言って、「曜日制部員も、アスリートが一所懸命やっているところに関わるんやから、それなりの覚悟を持って出てきなさいよ」ということを再度確認したら、曜日制部員がまたいなくなってしまった。まあそんなことの繰り返しです。

(4) 現在の状況ーアスリート、フットサル、女子の3チーム体制

で、今どうなっているのかというと、アスリート部門はこれはこれでやっています。この連中がDUOリーグに参加したり、高体連の大会に出たりしてます。人数はちょっと持ち直して、1、2年生で17人です。フットサル部門は、設立当時の人が卒業したあとは半ば立ち消え状態で、フットサルワールドカップの時だけ顕在化するバーチャル部門になってたんですが、今年の1年生でフットサルそのものをやりたいという者が出てきて、その連中がコアメンバーとして5人、曜日制部員が2～3人、ハンド部の練習がない時に参加する者とか、今はシーズンじゃないのでボート部の子が参加したり、そんな形でのフットサル部門。そして実は去年から女子部門ができて、女の子でサッカーをやりたいという者が、これも11人いないので、主にフットサルをやっています。3部門が活動していて、それぞれにキャプテンがいて、そして今年から3部門ごとのキャプテンとは別に、「サッカークラブ長」もポストとして生まれて、学校の中での活動の活性化、これを学校に認めてもらってさらに多くの人に知ってもらおうっていう活動を繰り広げています。

(5) サッカークラブとしての活動

その一環が、ワールドカップ 200 日前イベントとして全国各地で行われた「KICK TOGETHER」。どんなゲームでもいいんですけど、ゲームをやってその結果をJAWOCに報告して、先着 2002 試合まで有効、参加した人はピンバッジがもらえるというんですけど、これを連中が企画して、筑波大学附属高校会場で一般生徒も含めてやりました。70～80 名が休みの日に集まりました。

それに気を良くして、連中がまた第2弾、「クリスマス・フェスティバル」というのを企画しまして、それが資料にあるものです。サッカークラブ主催「クリスマスフェスティバル」。今、着々と準備が進んでいるもので、内容は男女ミックスフットサル大会、参加者はサッカークラブ3部門のメンバーと本校生徒の希望者、それにサッカークラブOB。「KICK TOGETHER」のときはOBには声を掛けなかったんですが、今回はOBもありと。来週の火曜日までにエントリーしてもらって、チーム編成はこっちであらかじめ決めておいて、皆ごちゃ混ぜにチームを作ってゲームを楽しみましょう、これを12月27日に学校のグラウンドでやろうということです。そんなことをやりながら自分達の活動を知ってもらうとともに、サッカー好きを増やしていこうと。

各部門はそれぞれチームなのでチームワークをもちろん求めるんですけど、部門を越えたクラブワークも求めます。毎週金曜日の昼休みにサッカークラブ全体のミーティングがあって、クラブの方針や方向性、イベントをどうやるかっていう話をやっています。「サッカークラブ3部門」という言い方をしているんですけど、これが全てではありません。例えば「見る」のが楽しい連中の部門とか、サッカー新聞を作って「伝える」のに自分の生きがいを見出したりする連中とか、そういうのが出てきても全然かまわない。あるいは「マネジメント部門」が出てきてもいいと思う。要するに、一つの学校サッカー部なんですけど、これはまさに「クラブ」だと思います。ある年度で切ったらこうなるけど、卒業生が出てくるし、これから先もずっと続いていくことなので、年代を超えて、学校を核としたクラブというのが十分可能だと思います。

実はもう既に、うちの学校でもそうですけど、OBの方々も活動されています。超OB同士、神戸一中や附属中、浦和中や湘南中など、当時の人たち同士のネットワークとか、その下の年代の人たちとかで。これらを含めた「学校クラブ」は十分可能性があるんじゃないかと思っています。

これが、私の学校のサッカー部周辺で今起きていることです。

■■■ 3. 「FCDUO構想」について

DUOリーグに絡めてもう一つだけ言いますと、本年度の活動方針で「FCDUO構想」も視野に入れています。学校単位のクラブ化と同時に、DUOリーグで日頃ゲームやっている連中の仲間意識もかなり強固になってくるんです。聞いた話では、よその学校の卒業生同士でチームを作って大会に出たりということを彼らは既にやっているんです。僕が「FCDUO」と言っているのは、そういうのを組織的にやりたいなっていうことなんですけど、実はもう彼らの方が先にやっている。例えばDUOリーグ加盟クラブの連合組織をもし仮に「FCDUO」という形で位置付けて、その第1種年代、大人の年代のチームを作ったら、文京区と豊島区をホームタウンとするかなり大規模なクラブができると思いますね。もしそれができれば、DUOリーグは「FCDUOのユースチームがリーグ戦をやっている」という位置付けになると思います。これが可能かということとはちょっとわからないので現在検討を開始しているところです。

一応筑波大学附属高校サッカー部の試みとFCDUO構想も含めて説明させていただきました。

<ディスカッション2>

★オフィシャル化と遊びの部分

●非常に遊び心一杯で、先生が一番楽しんでいるような感じがして聞いていたのですが、子ども達もこういう先生が入ってくると楽しみじゃないかなというふうに思います。オフィシャル化を進めていくと、遊びの部分とどう折り合いをつけていくのが難しいと思うのですが

○てっぺんから一番下まで全部同じルールを適用するんじゃなくて、どこかで線を引くようにしないといけないと思います。それが東京都の全体リーグのレベルなのか、一つ下の地域レベルのリーグからきちんとしていくのか、それはまだわからない。けど、元々は遊びなんで、遊び心が残る余地を残さないとスポーツマイノリティが排除されてしまうのかなと思います。現在検討中です。

★DUOリーグの成果

●このリーグに参加している学校は、公立とか私立の割合はどうなんですか？中学校の選抜チームが後期だけ参加していますがそこらへんでの中学生が参加することになった当時のいきさつ、実際に参加していた選手達がこのリーグ戦に参加しての感想をお聞かせください。

○感想の方から言いますと、特に今まで出番がなかった子はものすごく喜んでますね。最初の頃はDUOリーグの優勝ということ自体にはそんなに重きを置いてなかったけど、最近はDUOリーグの優勝

や1部昇格が、彼らのモチベーションになっています。やって良かったという感想をよく聞きます。中学生の後期リーグ参加については、年間を通しての参加は中体連のスケジュールを考えても現状では無理です。文京区中学選抜は、中体連的にも組織はされてるんです。大体1～2月に選考をやって3年生になる前に区対抗の選抜大会をやります。4～6月には中体連の大会があって、それで中学生の活動は終わりです。選抜の活動は1～3月で終わり。だけどその子たちが再び集まってくる機会を設けることで、彼ら自身も「やあ、久しぶり」みたいな感じですごくいい場になっていると思います。学習院、京華、豊南、昭和一、駒込…このあたり全部私学です。私学だから教員の異動がありません。移動があるのは小石川と向丘。これが都立ですね。筑波大学附属は国立なので異動がない。教員の異動がないのはすごく有り難いことなんですけど、例えば向丘ではこんなことがありました。一番最初に立ち上げた時の先生が異動される。そのときの第2顧問が仕方なくDUOリーグに付き合ってくれるのですが、やっているうちにめり込んでいく。けど今度はその先生が異動される時に、あとを継いでくれる人がいない。そこで学校の中に「DUOリーグ顧問」というポストを置き土産にしていってくれた。つまりDUOリーグのときだけついてくる当番みたいなものです。だからその年は、向丘は毎回付き添いの先生が違っていました。実際はOBがずっと面倒みてくれていたんですけど。今はサッカー経験のある方が顧問についておられます

★リーグ加盟クラブの条件

●公立高校には呼びかけたんですか。

○全体にはしていません。オフィシャル化するときにはこんなやり方では絶対に駄目ですね。オフィシャル化するということは、広くそのサービスが全体に行き渡るようにしないと行けませんから。DUOリーグ規約の参加資格の一番最初に、「指導者が志を同じくする」ことを入れています。まず僕が、この人ならわかってくれるんじゃないか、この人にわかってほしいという人に呼びかけて話をしました。ちょっと政策的な意図もあります。例えば小石川高校にいた上野二一先生は、今、全国高体連の委員長、日本サッカー協会の2種のリーダーですが、当時は東京都高体連の委員長でした。この先生には絶対仲間入ってもらおう、入ってもらえると全国にうまく発信できるぞという読みもありました。今も入れて欲しいと言ってくるところも多いですが、まず言うのが、ここに入ったらリーグ戦ができるという気持ちだけならやめてください。DUOリーグのメンバーになるとは、理念を共有して、つまり運営の当事者となることです。そのことを厳しく言ってます。それでも入ってくれるというのなら、NOという要素は何もありません。むしろ理念の賛同者を増やしていきたいので、どんどん受け入れていきます。

●環境的に恵まれないチームを救ってあげることはできるのでしょうか（といった主旨の質問）

○大事なものは救ってあげるとかそういうことではなくて、サービスを提供する側と受ける側という関係ではなくて、互いに当事者になるということです。先ほど申し上げた通り、まず最初に、理念に賛同するかどうかわかり確認して、DUOリーグのメンバーになるということは当事者になることですよ、というのをしっかり念を押して仲間になってもらう手続きを踏む。当事者になれるかどうかを確かめているのです。

★高校生の選択能力（自己決定能力）の問題

●高校生という年代で、自分自身で選択する能力がどの程度あるものなのか（といった主旨の質問） ○たとえばアスリート部門は、自分は競技者として一所懸命やることを選んだ者です。そうじゃない方を選んでいいわけです。しかし、どうしても安きに流れる部分はある。レジャー志向の部門を選択すると言うのは逃げ口上で、ただ厳しいのから逃れて遊んでいるだけかもしれない。要は、選択肢をいくら用意しても選択できるだけの段階に達していない。あるいは、所詮高校生ですから、その時に思ったことをずっと貫き通せる訳じゃない。むしろ揺れ動く方が自然です。ですからこういう受け皿を学校の中に一杯用意してあげるのがいいのかどうかは、現場の指導者としてはまだ答えは出ていないんです。むしろこの年代には、有無も言わず一所懸命やるのが大事なんとグイグイ引っ張っていく方が、また前近代的になってしまうけど、大事なのではと思うこともあります。だから言われているとおり、一つの実験ではあります。ただ筑波大学附属高校の連中のレベル、これは学力だけじゃなくて、選択できる力ということであると、結構いい線いってるなと思います。だからこういう活動ができていのかなと思います。おそらくDUOリーグ加盟クラブそれぞれが似たような問題を抱えていると思うんです。それは現場で解決していかななくてはならないと思います。

★2010年の「イベント」のイメージ

●高体連の大会や定期戦のようなものとどう折り合いをつけてくのか（といった主旨の質問） ○「2010年のサッカー環境構想」を見ていただければいいのですが、補足します。リーグがやっぱりベースであろうと。さらにカップ戦というのもあっていいでしょう。これは従来あるような高体連の主催大会があってもいいし、もっと言うと、リーグには加盟しないけどカップ戦には参加するチームがあっても全然かまわないと思います。リーグの一員になるということは、さっきも言いましたが当事者になるということですから、これははっきり言ってかなり大変です。けどもっと手軽な関わり方があってもいいと思うし、手軽に競技会に参加してチャンピオンになれる道筋があってもいい。それがノックアウトシステムのカップ戦です。だからこれはこれで残していったらいいと思います。同時にフェスティバル、これは例えば各クラブとかクラブユース連盟という単位で用意してあげたらいいし、さらにクラブ間の定期戦があってもいい。競技会をこうやって整理して、それを年間スケジュールの中にバランスよく配置することで、選択の幅が広がるんじゃないかと思います。その中の何を選ぶのかは個人の問題ですし、それぞれのクラブで考えればいいことです。

★DUOリーグの実務

●DUOリーグの運営は、誰がどのようにしているのですか ○加盟クラブの代表者は全員運営に携わります。「DUO会議」を要所要所で開いて、これは高校生も含めて誰でも参加できて発言権を持つんですが、採決に加わることができるのはクラブ代表者だけです。具体的な運営は、チェアマンがいて、私なんですけど、あとは会計担当を2人でやってもらってます。これは結構大変なんです。毎試合審判手当てを用意して試合会場に持っていく作業をやっています。あと

競技担当ですね。組み合わせを作るのを2人でやってもらっています。競技担当の仕事は年度始めに終わります。スケジュール表ができればそこで終わりです。あとは広報担当がいます。ここを重視しているので、チェアマン自ら乗り出してDUOリーグ通信を作成して、ここでメッセージを伝えたりしてるわけです。ですから運営の中軸スタッフは会計、競技、広報の部分ですね。

★付き添いの問題－参加チームの条件

●複数のチームが出ているところで、付き添いが一人で困ることはないのですか

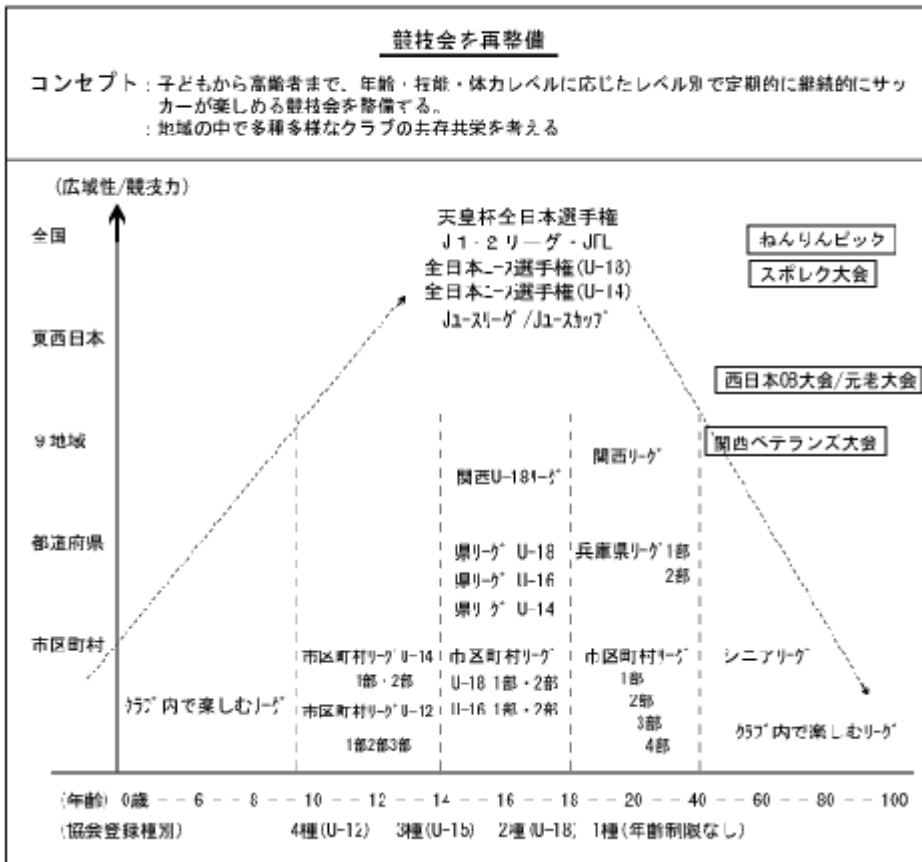
○DUOリーグの試合には必ず20歳以上の大人が付き添うこととしています。教員じゃなくてもかまわない。エントリーの段階で、それぞれのチームの「大人」を決めてもらいます。実際は会場に色々ノウハウを持った大人が来ているので問題なく展開しています。いつも思うんですけど、例えばサッカーのことを全然わからない教員が付き添うのと、サッカーの勉強をしているOBが付き添うのとでは、スポーツ的に言ってどちらに意味があるのかということです。もし何か事故が起こって裁判になったりした時、学校的にいうと教員じゃないと駄目なのかもしれない。ですけどスポーツ的にいうと、どっちがいいのかは一目瞭然です。ですからそういう部分を、むしろこういう活動を通して社会認識を変えていく、啓蒙していく、そういうことが必要じゃないかと思います。各チームに大人が付き添うことが原則ですので、例えばAチームとBチームを同じ会場でやらせてあげようという配慮はしません。そういうのをいちいちやっているとゲームが組めない。決められたところに大人がしっかりついて、ゲームを行う態勢をそれぞれでつくって下さい。用意できない場合は、例えば50人いるけど1チームしか出られないというのは当然出てきます。だから、リーグのメンバーになるのは大変なんです。オフィシャル化の話に戻りますと、オフィシャル化したからといって東京都の全チームが入ってくるとは限りません。多分無理だろうと思います。リーグのメンバーになるのは恐らくその中のある一定の資格をクリアーした者である。その代わりに、一つの学校から3チーム4チーム出てくることもあるだろうし、複数の連合軍が地域のクラブという形で出てくることもあると思います。

<司会者（加藤寛氏）まとめ>

非常に興味深い試みで、スポーツ社会学で勉強したことを学校という環境でありながら、地域の中で子ども達を育てるという視点を持ちながらやられているんじゃないかなと思いました。

一つだけ、中塚先生のじゃない資料があります。「2010年のサッカー環境（加藤試案）」と書いてある私が作った資料ですが、これは文部科学省、兵庫県がやっていることを中心に書きまして、スポーツクラブ委員会の中で提案したものです。2枚目の最後の表、「2010年のサッカー環境モデル」で表しているところは、競技会を再整備する必要があるでしょうと。「子どもから高齢者まで、年齢・技能・体力レベルに応じたレベル別で定期的に継続的にサッカーが楽しめる競技会を整備する」必要があるんじゃないでしょうかということと、「地域の中で多種多様なクラブの共存共栄」を考えましょうというものです。多種多様なニーズというのが学校のスポーツの中でもあって、それに応えるような取り組みを、今、話されたんじゃないかと思います。

「2010年のサッカー環境モデル」



「2010年のサッカー環境モデル」の表は、横軸に0歳から100歳まで年齢を取って、縦軸がレベル、競技力と広域性として考えてみました。私は神戸フットボールクラブの中で育ってきたんですけど、幼稚園の子供たちは自分たちのクラブの中だけでサッカーをまず楽しむところからはじまる。ある年齢になると少しずつ競技レベルが上がって行って、クラブ内だけでは満足しなくなり、ちょっと隣近所と試合をするようになる。もう少し年齢が上がってくると、県のレベルぐらいまで上がってくる。あるいはもっと上のレベルになると、関西のレベルまで入ってくる。リーグをベースとしながらも、カップ戦としては、中学生年代になってくると全国レベルの大会も入ってくる。その中である一部の人間は、U-18の日本代表とかになって、プロになっていく選手もいる。しかしだんだん年をとって40歳を越えるようになってくると、ベテランズ大会やOB大会のような単発イベントに参加するというのもありますけど、ほとんどの人が地域リーグや自分のクラブに戻ってきてやるんじゃないでしょうか。こういうことを多世代で、チームじゃなくてクラブの中でやれるような場が、兵庫県内でたくさんできてくれば、競技人口はむしろ増えていくような形ができるのではないかと。

もう一つは、競技レベルの高い人は高いレベルのクラブに移籍する。洋の東西を問わず、能力の高い人は環境の整った、ちゃんと指導できるところに移籍していくというのが普通の考え方なんです。それ

を、自分のところが育てた者を取られていくという感覚が日本ではあるんで、その感覚を変えてしまわないと駄目だと思います。これは指導者も同じです。立場を超えて、能力の高い人には能力の高い、整った環境で指導ができるようにしていくことが大事です。それを2010年までにできるかどうかはわかりませんが、そんなふうに私は提案したいなと思っています。ほんとに遠いところ来ていただきまして、興味深い話をありがとうございました。